

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人をご紹介します



合田 直弘

先月のこのコラムで、ケンタッキーダービーの有力馬をご紹介したが、今月は、この会報が皆様のお手元に届く頃に芝の平地シーズンが開幕している、英国のダービーで最有力視されている馬をご紹介したい。

6月4日にエプソムで行われる第243回英国ダービー(芝12F6y)へ向けた前売りで、ブックメーカー各社が3.5倍から5.0倍のオッズを提示し、抜けた1番人気に推しているのが、A・オプライエン厩舎のルクセンブルク(牡3、父キヤメロット)だ。

ベン・サンングスター氏の生産馬で、サンングスター夫人の所有馬としてデビューしたものの、8戦して未勝利に終わったのが、ルクセンブルクの母アタイアだ。サンングスター氏は同馬を繁殖牝馬として手元に残し、その5番仔として生まれたのがルクセンブルクである。

もともとは仏国でダニエル・ヴィルデンシュタインが育んだファミリーで、近親には、GIBCクラシック(d10F)を含む2頭のG1を制したアルカンギャ、G1仏オークス(芝2400m)など3つのG1を制したアクアレリストらの名前が並んでいる。

アタイアの8歳年上の半姉に、G3フワール賞(芝2100m)勝ち馬オーストラリーがいて、4歳年上の全兄に、G3グロリアスS(芝11F218y)勝ち馬フオーゴ

ットンヴォイスがいるから、背景にあるのは活気に溢れた牝系と言えよう。なおかつ、アタイアの2番仔として生まれた父オーストラリアの牝馬(ルクセンブルクの3歳年上の半姉)は、レオデフュリーという名でデビューし、G2ムーアスブリッジS(芝10F110y)を制した他、G3ロイヤルホイップS(芝10F)2着などの実績を残していた。競走馬としては期待外れに終わったアタイアだが、母としては優れたところを見せ始めていたのである。

それにも関わらず、だ。ルクセンブルクは1歳秋に、ニューマーケットで開催されたタタソールズ・オクトバー1歳セール・ブック1に上場され、ここで現在の馬主であるクールモア・グループに購買されたのだが、この時の価格は15万ギニー(当時のレートで約2225万円)であった。オクトバーのブック1と言えば、欧州でも選りすぐりの良血馬が集うマーケットだけに、お値段もそれなりにお高く、この年の平均価格は22万3266ギニー(約3312万円)だった。すなわち、ルクセンブルクは平均価格の3分の2程度というお手頃価格での購買だったのだ。

ましてや、上質馬を高額で落札することで知られたクールモアである。この市場でクールモアは、父ガリレオの牝馬を340万ギニー(約5億0433万円)で購買したのを筆頭に、14頭の1歳馬を購買し

たが、ルクセンブルクの15万ギニーというのは下から数えて5番目の価格だった。そういう仕入れ値の馬が、1年後にはダービー候補ナンバーワンの座に昇りつめるのだから、競馬は面白い。

ルクセンブルクは昨年7月14日にキラニーのメイドン(芝8F40y)でデビュー。ここを2.1/4馬身差で制して緒戦勝ちを飾った。

同馬の2戦目となったのが、9月25日にカラで行なわれたG2ベレスフォードS(芝8F)で、ここも4.3/4馬身差で制し、無敗の重賞制覇を果たした。

ルクセンブルクの1歳年下の全弟が、キルデアで開催されたゴフス・オービー1歳市場に上場されたのは、ベレスフォードSのわずか4日後のことだった。弟もクールモアが購買することになったのだが、価格はセクション2番目の高値となる120万ユーロ(当時のレートで約1億5829万円)だった。

ルクセンブルクはその後、10月23日にドンカスターで行なわれたG1フューチュリティトロフィー(芝8F)に出走。これも1.3/4馬身差で制した同馬は、3戦3勝の成績で2歳シーズンを終えることになった。

英国ダービー戦線の主役ルクセンブルクの動向に、ぜひご注目いただきたい。